

2026. 3. 22 (日) マタイ 27:57~66

27:57 夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちの、ヨセフという名の人 came。彼自身もイエスの弟子になっていた。

27:58 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。

27:59 ヨセフはからだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、

27:60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入り口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。

27:61 マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた。

27:62 明るる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところ集まって、

27:63 こう言った。「閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、『わたしは三日後によみがえる』と言っていたのを、私たちは思い出しました。

27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言うかもしれません。そうになると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。」

27:65 ピラトは彼らに言った。「番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。」

27:66 そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした。

#### <説教>

本日の聖書箇所には、十字架上で死なれたイエスのからだは墓に葬られたことと、翌日にその墓について為された出来事が記されています。

受難週の水曜日に、ベタニヤで、ある女性がイエスの頭に非常に高価な香油を注いだとき、イエスは「この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。」(マタイ 26:12)と言われました。使徒パウロがコリントの教会に〈最も大切なこととして伝えた〉(I コリント 15:3)ことの中には、〈キリストは、…葬られたこと〉(同 15:4)があります。使徒信条の中でも、主イエス・キリストが「(十字架につけられ、死にて) 葬られ」と告白しています。これらから言えることは、イエスのからだは葬られたということは必然であり、その意義は大きいということです。

どういう意義かということ、第一に、それによってイエスが本当に死なれたこと、イエスの死の事実が確かめられたということです。もしイエスの死が事実、現実でなければ、その後の復活は偽りとなってしまいます。本当の復活は「死者の復活」でなければなりません。キリストが本当に死なれたのでなかったとしたら復活は空しいものとなります。イースターも偽りの空しいお祭り騒ぎとなってしまいます。

そのように大事なイエスの葬りを実行した人として記されているのがアリマタヤ出身のヨセフです(57-58)。〈夕方〉は金曜日の夕方です。安息日の土曜日が迫っていました。ユダヤの律法では、死刑囚でも木にかけられた死体はその日のうちに必ず埋葬しなければなりません(申命記 21:22-23)。翌日が安息日なので尚更でした。本来ならペテロを始

めとした使徒たちが行方ところでしょうが、既に彼らは皆イエスを見捨てて逃げてしまっていました。それで、〈イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していたアリマタヤのヨセフ〉(ヨハネ 19:38)が登場します。イエスを嫉み憎み殺した祭司長たち、律法学者たち、長老たち、ユダヤ人たちは健在です(すぐ後に出てきます)。彼がユダヤ人たちを恐れる状況はそれまでと変わっていないように見えます。それでも彼は〈勇気を出してピラトのところに行き〉(マルコ 15:43)ました。確かに神が彼に勇気を与えて、イエスの葬りのために彼をお用いになったのです。彼がそれまで〈隠していた〉ということは確かに恥ずべきことでした。しかし、ペテロ他の使徒たちのように、平時にはイエスの弟子であることを告白していても、自分の身に危険が迫って来るいざという時にイエスを否定して逃げてしまったのも同じく恥ずべきことでした。私たちとしては、平時でもいざという時でも、変わらずイエスの弟子であること告白し続け、イエスに従い続ける者であるべきです。このことはかつての戦前戦中の日本の教会の姿からも学ぶべき教訓です。

使徒たちについては、全くの恵み、あわれみとしか言えないことですが、復活の主の方は彼らを見捨てず、まさにその復活のからだをもって後に彼らに現れてくださり、ご自分が本当に復活なさったことを示し、改めての主の御用のために召し、彼らを悔い改めさせ、再び立ち上がらせてくださいました。更に後には聖霊を豊かに注いでくださり、主の復活の証人として尊くお用いになりました。私たち日本の教会に連なる者も悔い改めの実を結ぶべく、今の恵みのときを無駄にすることなく、主の証人として用いて頂きたいと願います。また、アリマタヤのヨセフのように普段から人を恐れてイエスの弟子であることを隠している人は悔い改めて、自分がイエスの弟子であることをはっきりと証ししましょう。また、普段も、いざという時にも〈勇気を出して〉イエスの弟子であること告白し、イエスに従うことができるように主の助けを日々祈り求めましょう。

さてイエスは私たちの罪のために、自ら十字架の上で私たちの罪をその身に負われ、私たちの身代わりに神の刑罰を受け、神に見捨てられ、人からも見捨てられて、人の目には惨めに死なれました。しかしイエスの遺体は、ピラトの正式な確認(マルコ 15:44-45)と許可命令により、〈金持ち〉の手によって確かに〈受け取〉られ、その手で〈きれいな亜麻布に包〉まれ、ヨセフの〈新しい墓に納め〉られました。これら一つ一つの行程を通してイエスが本当に死なれたことがヨセフの手ずから確認され、証言されたのです。また、〈マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにおいて、墓の方を向いて座ってい〉ました(61)。彼女たちもイエスが葬られたことを目撃証人となりました。こうして、イエスの地上の生涯は貧しく、悲惨な十字架の死を遂げられましたが、その遺体は金持ちの弟子の手によって丁寧に扱われ、金持ちの墓に丁寧に葬られました。そうやって神はアリマタヤのヨセフを用いて、ご自身が三日後になさろうとしていた栄光のみわざ、復活の備えをなさったのです。イエスの葬りの意義の第二は、栄光の復活の備えにありました。イエスは復活して墓から出て行くために、一旦墓に葬られた、と言っていいでしょう。

さてそんな神の御意思とは全く違うことを考え、イエスが復活したことになると困る人々、すなわちなお悪魔の惑わしの中にあつた人々がいたことをマタイは記しています。〈備え日の翌日〉つまり安息日その日に〈祭司長たちとパリサイ人たち〉はピラトのところ集まって陳情し(62-64)、墓に行つて番兵たちとともに石に封印をして墓の版をする(66)という「仕事」をしました。イエスが安息日に病人を癒やしたただの弟子たちが麦の穂を積

んで食べたのだと今まで何度も非難してたくせに、です。彼らはピラトに訴えました(64)。そしてピラトによってここでも正式に番兵の出動が命じられ、先にヨセフが転がしておいた入り口の大きな石に封印がされ、ピラトの兵士たちの番が始まりました。彼らはこれでもう大丈夫とでも思ったのでしょうか。

しかし彼らは大いなる思い違いをしていました。臆病にも皆逃げてしまっていた弟子たちがイエスのからだを取りに墓に来ることなどあり得ませんでした。そして何よりも、彼らは実際には「聖書も神の力も知らない」のでした (cf. マタイ 22:29)。せっかくイエスが言われていたことを思い出したのなら(63)、悔い改めてイエスを信じ、死者をも復活させる神の力を信じればよかったのに、と思います。しかしそうはせず、「イエスの復活」におびえていました。それは彼らを支配していた悪魔のおびえでもありました。

やがて彼らの不安は的中し、イエスが言われていた通りにイエスは復活し、三日前に葬られて封印を破り、番兵たちを震え上がらせ、死人のようにして(28:4)、無力にして墓から出ていかれます。イエスの復活を阻止しようとして行われた石の封印も、用意された番兵たちも、かえってイエスの栄光の復活を証言するもの、イエスの復活に奉仕するもの、その意味でイエスの復活の備えとされました。神がそうなさいました。

こうして神のみわざを妨害しようとする人間の企ての全く空しいことが明らかになるのです。イエスを死者の中からよみがえらせようという神の御意思と力の前に、人間のすべての小賢しい企みは、空しく、無力なのです。この神の前に、主イエス・キリストの前に、私たちはへりくだり、礼拝し、賛美を献げ、祈りを献げ、自分自身を献げ、イエスの弟子としていつでもイエスを大胆に証しし、イエスに従い歩んで行きましょう。